九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

總章元年唐將薛仁貴の攻陷せる扶餘城 : 靺鞨七部考第三章附說

日野, 開三郎

https://doi.org/10.15017/2339009

出版情報：史淵. 44, pp.19-54, 1950-08-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

總章元年唐將薛仁貴の攻陷せる扶餘城

——靺鞨七部考第三章附說——

日野開三郎

目次

緒言
第一章　七部の住域（三六・三七合輯號）
第二章　七部の前身とその屬種（三八・三九合輯號）
第三章　粟末靺鞨の對外關係（高句麗滅亡以前）
　第一節　西方遊牧勢力との關係
　第二節　高句麗との關係
　第三節　中國との關係
　第四節　室韋及び靺鞨他部族との關係（以上自四一至四三輯）
附說　總章元年唐將薛仁貴の攻陷せる扶餘城
　第一項　隋・唐・高句麗の史籍に見ゆる扶餘の地名とその位置
　第二項　支那・滿洲兩勢力の攻防戰に於ける扶餘地方の意義
　第三項　唐・高句麗の決勝戰と薛仁貴の扶餘城攻陷（以上本輯）
總章元年唐將薛仁貴の攻陷せる扶餘城

附　說　總章元年唐將薛仁貴の攻陷せる扶餘城

莫離支として文武の大權を一身に收め、事實上高句麗に君臨して、內は强力な獨裁權を振ひ、外は大唐と堂々の抗戰を續け來つた泉蓋蘇文が麟德二年（六六五）十月の頃死歿すると、その三子、男生・男建・男產の間に內訌を生じ、長子男生は二弟に逐はれて國內城（通化省・輯安縣）に入り、その子の獻誠を唐に遣し、內附と救援とを請はしめた。獻誠の着唐は乾封元年（六六六）五月又は六月の初め頃で、此の報に接した唐は、六月七日、契苾何力（歸化突厥人）を遼東道安撫大使として赴援應接せしめ、なほ別に龐同善・高侃を行軍總管、薛仁貴・李謹行（隋以來歸屬せし扶餘靺鞨の巨酋突地稽の長子）を殿後軍の將として差遣した。一方海上よりも軍を送り、又先に滅した百濟の故地に留鎭せる唐軍にも赴征を命じ、更に新羅にも助征の軍を發せしめた。かくも大掛りな包圍攻擊を開始したのは、此の內訌を好機として一擧に高句麗を滅し、以て長年の攻爭を片附けんとしたからである。次いで此の年十二月十八日、英國公李勣を遼東道行軍大總管兼安撫大使に任じて征麗諸軍の總司令官とし、上述せる一切の軍を節度せしめた。此所に征麗軍の陣容は全く整つたのである。此の役の詳細な始末に就いては已に池內先生が「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」と題して論じ盡されてゐるので、此所に更めて云爲す可きものは無い。只此の役に於いて殿後軍の將たりし薛仁貴が總章元年（六六八）に攻陷したと云ふ扶餘城（扶餘城州・扶餘州とも傳へられてゐる州の治城）は本稿の一大論心となつた幷餘靺鞨と關係を有つ重要な問題であるにも拘らず、その位置の比定に關する從來の研究は各說各樣で一定せず、それ等諸說の綜合批判の上に立論せられた池內先生の所說にも尙再考の餘地あるやに想ひ

れ、綜じて未だ確たる鐵案に到達して居ない樣である。此の附說の目的は右の扶餘城の位置を明確にして學界に於ける從來の疑問を解き、併せて本論の補足に資せんとするに在る。

薛仁貴の扶餘城攻陷に關する記事は資治通鑑卷二〇一唐紀・總章元年二月壬午の條に

薛仁貴既破高麗於金山。乘勝將兵三千冊府元龜・新舊唐書並作二千人。將攻扶餘城。諸將以其兵少止之。仁貴曰。兵不在多。顧用之何如耳。遂爲前鋒以進。與高麗戰大破之。殺獲萬餘人。遂拔扶餘城。扶餘川州之鷄？中四十餘城。皆望風請降。

と見え、尙冊府元龜卷九八六外臣部・征討門、舊唐書卷八三及び新唐書卷一一の各薛仁貴傳にも此に相當する記事が收められてゐる。又此の記事に先行して此の攻城戰の前段をなす戰の記事も傳へられてゐる。然しそれ等の詳考は逐次行ふこととして、先づ此の扶餘城の位置に關する從來の研究を見るに、松井學士の農安附近說[註2]、津田博士の佟佳江下流說[註3]、池內先生の咸興說等[註4]があり、此の中最も夙く提唱せられた松井學士の農安附近說は殆んど失考と斷定せられてゐるのが現狀である。卑見を開陳するに當つては順序として先づ此等の諸說の內容を紹介し、その當否に就いて一應の批判を加へおく可きであるが、それは簡略たる可き附說の趣旨に反することとなるので略す。又扶餘城攻略の經緯を明かにする爲め、高句麗討滅戰の概要をも豫め述べおくを便とするのであるが、此れ亦略す。上揭池內先生の御勞作に已に詳說せられて居り、此所に反覆する必要はないからである。此所では只必要な部分を先生の御勞作中から適時適所援用させて戴く。本附說中に於いて考證を爲すこと無く直ちに已明の事實として引用してゐる所のものは、特に斷らざる限り、池內先生の考證の結果を利用させて貰つたものと諒解せられ度い。尙以下の論考は恩師や大先輩の御勞作に啓發誘導せられて成つたものであり乍ら、然もそれ等の諸說に或は不足を云ひ、或は反對を稱へなければならなく

なつたもので、此の點自ら深く省みて充分愼しむつもりであるが、性來野人の筆者、或は論中失禮にわたる文辭無きかを惶れてゐる次第で、萬一かかる過失を犯すことあらんも、それは筆者の本心に非る所として御寛恕せられんことを切に乞うておく。

第一項　隋・唐・高句麗の史籍に見える扶餘の地名とその位置

太平寰宇記に引く隋の「北蕃風俗記」に、粟末靺鞨の一巨酋突地稽なる者が八部の衆を率ゐて扶餘城の西北より隋に奔來し歸化したとあること、此の扶餘城が今の農安附近の地に當り、突地稽が遠く隋に走つたのは高句麗との抗爭に敗れた爲めであり、それは開皇四五年（五八四―五八五）頃であつたこと等は本論に詳考した所である。

次に高句麗が唐の來侵に備へんとして東北扶餘城より西南海に至る千有餘里の長城を築いたことが新舊各唐書の高句麗傳に見えること、此の扶餘城も亦今の農安地方に當ること、築城に着手したのは貞觀五年頃（六三一）で、出來上つたのは八年頃と推定せられること等も亦本論に詳考した如くである。

次に舊唐書卷三九地理志の愼州の條及び黎州の條の記事に依り、唐初以來歸化してゐた粟末靺鞨烏素固部が一に浮渝（扶餘）靺鞨とも呼ばれ、且つ浮渝靺鞨の名は載初二年（六九〇）に至るも尙存用せられて居たことを知り得ること、彼等の原住地は扶餘、即ち農安を中心とする伊通河流域で、扶餘靺鞨と呼ばれたのもそれが爲めであると推定せられること等も本論に論述した如くである。

新唐書卷二一九渤海傳に列擧せられてゐる此の國の十五府の一に扶餘府の名が見えるが、此れが今の農安附近に當ることは已に夙くより論明せられてゐる所である。扶餘府設置の年代は未だ究明せられてゐないが、天寶末年（七五五）

頃には已に置かれて居たのではないかと思はれ、爾後、契丹の太祖阿保機が渤海を討滅した天顯元年（後唐の天成元年＝九二六）迄二百年近く存續した。因みに大渤海遠征に向つた契丹軍が最初に擊破した要府は此の扶餘府であつたのである。隋初より唐を經て五代に至る三百數十年間を通じ、今の農安附近に扶餘城、扶餘等と呼ばれる城地名が引續き存在してゐたことは、以上の諸例に依つて略々容認せられるであらう。

扶餘地方は粟末靺鞨の一大中心地で、頗る有力な集團が據つてゐた。本稿に謂ふ所の扶餘靺鞨がそれである。高句麗は隋初此の地方を占領して扶餘靺鞨を支配し、隋末唐初の頃、突厥に一時奪還されたが、貞觀の初め頃再び占收し、此所を基點として西南海に至る長城を築き、爾後、高句麗の滅亡する迄固く此の地方を支配してゐた。以上も亦本論に詳考した所である。高句麗が扶餘地方に長城を築いてから滅亡迄約五十年に近い。即ち高句麗は約半世紀間引續き此の地方を支配しその民を臣服せしめて居たのである。若し隋初より隋末に至る支配期間三十餘年をも加算すればその主從關係は約八十年となる。かうした關係をもつ扶餘靺鞨が高句麗と唐との最後の大決勝戰に不關焉の立場をとつてゐたとは考へ難く、必ずや相當重要な役割を演じたことと推想せられる。かかる推想の下に高句麗側の記錄を檢するに、三國史記卷三七地理志・第四篇・高句麗の章に左の記事がある。

Ⅰ　鴨淥水以北未降十一城。

北扶餘城州、本助利西。　節城、本蕪子忽。　豊夫城、本肖巴忽。新城州、本仇次忽或云敦城。　桃城、本波尸忽。　大豆山城、本非達忽。　遼東城州、本烏列忽。　屋城州。　白石城。　多伐嶽州。安市城、舊安寸忽。

Ⅱ　鴨淥水以北已降城十一、

掠嵒城。　木底城。　藪口城。　南蘇城。　甘勿主城、本甘勿伊忽。　委田谷城。　心岳城、本居尸忽。　國內州一云不耐。或云尉那岳城　屑夫婁城、本肖利巴利忽。　朽岳城、本骨尸坤。　蘖木城。

Ⅲ　鴨淥以北逃城七

鉛城、本乃勿忽　面岳城。　牙岳城、本皆尸坤忽。　就岳城、本甘彌忽。　積利城、本赤里忽。　水銀城。　本召尸忽。　犁山城、本加尸達忽。

Ⅲ　鴨淥以北打得城三

穴城、本甲忽。　銀城、本折忽。　似城、本史忽。

此の記事の性質は、已に池內先生の詳說せられて居る如く、唐軍の總帥李勣が高句麗の新城を攻陷する（乾封二年九月）以前に造られた鴨淥江以北の高句麗の諸城に關する覺書と解せられる。已降十一城は泉男生に從つて唐に請降せるもの、未降十一城は男建等に附して唐に抗爭せるもの、逃城は李勣の率ゆる唐の大軍が遼東に來るに及び、高句麗側に於いて兵力を要地に集中せしめる爲め自ら拔き去つた遼東地方の城、打得城は已に唐が攻めとつて居た城である。此の覺書きは高句麗の歷史を研究する上に極めて貴重な史料となるもので、凡ゆる角度からの檢討と活用とを試む可きものであるが、取り敢ず此所に問題としなければならぬのは、未降十一城、卽ち男建派州城名の中に見える「北扶餘城州」である。上揭の三十餘城は總て鴨淥江以北のものであるから、その一なる此の北扶餘城州を以て咸興方面に比定することは絕對に容されない。又此の扶餘城州に北の字が冠せられてゐるのは、單にそれが高句麗領中

の北邊に在つた爲めか、他に別の扶餘と呼ばれる地があつてそれと區別する必要があつた爲めか、その何れであつたにしても、とにかくその所在の北寄りであつたことを示すものとして注意す可きである。所で隋唐時代を通じて今の農安の地に扶餘と呼ばれる所があつたこと已述の如くであるから、此より東南に在る咸興或は佟佳江下流域を以て右の北扶餘城州に擬することは頗る穩當を缺く樣に思はれる。農安地方以外にも咸興若しくは佟佳江方面に同じ扶餘と呼ばれる地があつたとすれば、それは北扶餘でなく、東扶餘又は南扶餘と呼ばれた筈である。かく考ふるに、右の北扶餘城州が咸興や佟佳江方面に非ることは極めて明かであり、從つて寧ろ此を農安地方の扶餘城に外ならぬものと解するのが妥當となつて來る。此所を北扶餘と呼んだのは嘗て詳考した如く、高句麗の廣開土王（三九二—四一二）に滅された開島地方の東扶餘、長壽王の二十三年（四三五）、後魏より高句麗に遣された李敖の歸還報告に見える吉林方面の舊扶餘等と區別せんが爲めであつたと思はれ、從つて北扶餘の名は隋唐以前、南北朝の初め頃已に生れ、それが隋唐に迄因襲的に用ひられたのであつて、必ずしも隋唐時代に幾つかの扶餘と呼ばれる地があつたことを示してゐるのではない。かく三國史記の北扶餘城州を以て本稿に謂ふ所の扶餘靺鞨の中心たる農安地方の扶餘城を治所とする州に外ならぬものと解すれば、扶餘靺鞨は男建派、即ち抗唐派の側に立つて居たことなる。即ち唐と高句麗との最後の大決戰に於いて必ずや重要な役割をなしたであらうと先に推測しておいた扶餘靺鞨の動向が、三國史記の北扶餘城州を此所に比定することによつて、はつきりと浮び上つて來るのである。

隋唐時代に扶餘と呼ばれた城地名の史籍に現れてゐるのは、管見の限り、以上に列擧說明した五個の記事と、薛仁貴の攻陷したと云ふ記事と、共せて六個がその全部である。而して此の中、その所在の未だ考究せられざる最後の一

個を除き、既明の五個は悉く今の農安方面に比定せられること、上述の如くである。此のことは隋唐時代の扶餘城が農安地方のもの只一つであつたか、然らずとするも此れが最も知名の扶餘城で、單に扶餘と云へば此を指してゐたか、その何れかであつたことを推想せしめる。そして此の推想に基ゐて薛仁貴の記事に接する時、その攻陷せる扶餘城も亦農安地方に非るかとの考へが當然浮かんで來る。殊に三國史記の記事によつて此の地方の扶餘靺鞨が反唐派の立場を取つてゐたことも明かなのであるから、征麗の一部將たる薛仁貴が此を攻陷したのも何ら不思議でなく、寧ろ合理的に解せられる。要するに、隋・唐・高句麗の史籍に見える扶餘の地名に逐一的檢討を加へた結果は薛仁貴の攻陷せる扶餘城が農安地方なる可きを推測せしむるのである。尙此の推測は反唐的立場に立つた扶餘靺鞨の動きを具體的に考察し、それに對應せる唐軍の行動を檢討する時、一層その確實なることを認め得るのである。

第二項　支那・滿洲兩勢力の攻防戰に於ける扶餘地方の意義

唐將薛仁貴の攻陷せる扶餘城を以て農安方面ならんとする本稿の立場を確證づける爲めには、支那本土を根據とする大唐と南滿北鮮を根據とする高句麗との決勝的攻防戰に於いて農安地方は兩國の作戰上に如何なる意義を有してゐたかを明かにしておくことが必要となつて來る。然もそれは歷史的問題であつて、徒らに想像や理窟から勝手に考へ出す可きものでは無く、飽く迄歷史的事實の上にその意義を見出す可きである。そこで隋唐以前に於ける滿支兩勢力攻防の歷史を求めるに、三國時代に適例の存するを見る。

三國時代、滿洲に據つて居た勢力には公孫氏・高句麗・扶餘の三政權があつた。公孫氏は玄菟・遼東（但し公孫氏は遼東郡を更に遼東・中遼・遼西の三郡に分つてゐた）樂浪・帶方の諸郡を領し、その地域は開原附近以南、蘇子河

流域（玄菟）より、遼河流域以東鴨綠江下流域に至る（遼東）滿洲の地と、平安北道の一部、南道の全部、黃海道。京畿道の全部、忠淸北道の一部（以上樂浪・帶方）に跨る半島の地とを含んで居た。高句麗は佟佳江流域と鴨綠江中上流域とを根據とし、咸鏡道の沃沮、江原道の濊等を從へて居た。扶餘は農安の地を根據として粟末靺鞨の全住域にわたる扶餘族と、間島地方の北沃沮及び拉林・阿勒楚喀両河の流域等を領して居た。即ち此の三國の領域は合して後ちの高句麗の領土に略々相當し、稍それより廣い程度であつた。此の内の公孫氏は今の遼陽なる襄陽に據り、遙か南方の吳國と通じて魏を挾攻せんとする氣配を見せたので、魏は腹背受敵の不利を避く可く公孫氏の擊滅を企てた。かくて或は海路山東より遠征を企て、或は遼西陸路より進擊を試みたが何れも失敗した。因つて更に宿將司馬仲達を遣し、彼の巧妙な作戰指導に依つて漸く此を滅すを得た。公孫氏の滅亡したのは景初二年（二三八）八月である。所で此の司馬仲達の作戰を見るに、彼は自ら精鋭を率ゐて遼西陸路より進擊すると共に、山東より海軍を遣し、樂浪・帶方二郡を經略して南北より公孫氏を挾擊するの態勢をとつてゐる。そして此の戰略は彼の遠征を成功せしめた最大の原因をなしてゐると考へられるのである。[註6] 公孫氏を滅した魏は新に扶餘及び高句麗と境を接することとなつた。所で高句麗は魏の境壤を窺ひ、殊に海上に出でんとして鴨綠江口の西安平方面を奪はんとする形勢を示し、又遙かに江南の吳とも修好したので、正始五年（二四四）、魏は幽州刺史毋丘儉を遣して高句麗を伐つた。此の時の作戰を觀るに、毋丘儉は自ら精鋭を率ゐて玄菟郡（撫順）を出で、蘇子河に沿ひ、興京方面を經て高句麗の根據たる通溝方面に入り、致命的痛擊を加へると共に、魏志〇卷三扶餘傳に

正始中。幽州刺史毋丘儉討句麗。遣玄菟郡太守王頎詣扶餘。位居夫餘國王遣犬加効迎供軍糧。云云。

とある如く、別に玄菟郡太守王頎をして扶餘を經略せしめてゐる。此の遠征は扶餘が叛いた爲めでもなければ、魏が此所の占領を欲した爲めでも無く、いはば只兵威を耀かした丈であつた。當時の玄菟郡治は今の撫順に當り、此所からは北方會元堡を經て鐵嶺に赴く街道が走つてゐるから、王頎も郡を出て此の街道に由り鐵嶺・開原を經て農安なる扶餘の首都に入つたのであらう。所で只兵威を觀す爲めにのみわざわざ此の遠征を決行したのは何如なる事情に因つたのかと云ふことが新に問題となる。思ふに、此は扶餘の蠢動を未然に防がんとしたものに相違無く、又かく扶餘の蠢動を恐れたのは、被等が王頎と反對に玄菟に討つて出ることとなれば、此所より高句麗の內地深く進擊せる毋丘儉の軍が後方を遮斷せられ、重大な結果に陷るからであつたと解せられる。[註7] 即ち魏の高句麗遠征史は支那軍が渾河・蘇子河に沿う街道に由つて輯安方面に進擊する際にはその後方の安全を期する爲めに農安方面を制壓しておく必要のあつたことを敎示してゐるのである。

又先に論述した魏の公孫氏討滅戰史は、支那本土の軍が滿鮮に跨る勢力を討滅する爲めには、遼西陸路より攻め入ると共に、海軍を以て山東より朝鮮半島を攻略し、兩面より挾攻する必要のあつたことを敎示してゐる。

さて唐と高句麗との攻防を見るに、當時の高句麗は三國時代の扶餘・高句麗・公孫氏の三國の領土を併せた地域に畧々相當する（稍々せまい）地を悉く領有する强大な國家に發展して居た。從つて此を攻擊する唐としては、三國時代の歷史が敎へてゐる所の海陸よりする南北挾攻作戰を採る可きであつた。事實、唐の作戰は結果に於いて此の線に沿うた展開を遂げてゐる。即ち前後七回に及ぶ唐の高句麗攻擊は、初め遼西陸路よりの力攻に策戰の中心をおいてゐたが、成果思はしからず、よつて新羅との同盟を强化し、協力して先づ高句麗の盟國百濟を滅し、此所に軍隊を駐屯

せしめ、高句麗討滅戰當時には此の駐屯軍と新維軍とを以て高句麗を背面からも攻擊し得る態勢を整へてゐた。李勣を總帥とせる高句麗討滅戰の成功は、彼の將才に負ふ所大なるは勿論であるが、かうした挾攻態勢の事前に於ける整備が與つて力あつたことも見逃せない。

此の挾攻態勢の整備と共に、扶餘靺鞨の制壓が高句麗都城への突進に併行して重要な意義を有してゐたことも、三國時代の戰史に徵して明かである。殊に此の扶餘作戰は、唐軍が渾河・蘇子河に沿うて輯安方面に出擊する策戰を取らんとする場合は絶對に必要であつた。所で唐軍の進擊は、後述する如く、その重要な一路を此の街道に求め、契苾何力を將とする一團の軍を此より進めてゐるのである。從つて唐が扶餘靺鞨の制壓を絶對に必要として居たことは極めて明かである。然も此の扶餘靺鞨は反唐派の男建等に味方し、唐軍に敵對して居たこと已述の如くであるから、唐が此所に攻略の軍を送つたことは當然と云はねばならぬ。所で唐の扶餘城攻擊に關する記事は薛仁貴の攻陷記事を除いて他には見受けられない。從つて薛仁貴の攻略せる扶餘城は扶餘靺鞨の中心たる農安地方に在つたものと解す可きである。

唐の扶餘靺鞨攻擊は高句麗内に深く進擊せる主力部隊の後方聯絡を確保し背後遮斷の脅威を除くに在つたこと、已述の如くである。されば扶餘靺鞨制壓の任は殿後軍の負ふ可き性質のものであつた。隨つて扶餘城を攻陷した薛仁貴の職任を見るに、已述の如く、殿後軍の將であつたのである。此の一事こそは彼の攻陷せる扶餘城が農安地方なることを推斷せしむる大きな根據と云はねばならぬ。要するに滿支兩勢力の攻防戰に於ける扶餘靺鞨の地位を考へ、此を彼等が反唐的立場をとつてゐた事實と、唐軍の進擊策戰の實際とに結びつけて考察する時、薛仁貴の攻陷した扶餘城

とは農安地方のものであつたと斷せざるを得ないのである。而して此の斷定は兩國攻防戰の推移を細かく觀察する時、愈々その誤らざることが確證せられる。寧ろ此の斷定の上に立つに非れば、此の討滅戰に於ける兩軍の戰畧を合理的に解することは出來ないのである。因つて項を更めて兩軍の戰畧を仔細に觀察して扶餘城が今の農安の地なる扶餘靺鞨の根據であつたことを確證することとする。

第三項　唐・高句麗の決勝戰と薛仁貴の扶餘城攻陷

唐の高句麗討滅の役は高句麗の權臣泉蓋蘇文の死後、嫡子男生と二弟男建・男産との間に惹起された內訌の好機に乘じたものである。從つて此の戰役に於ける兩軍の作戰を考察するには、先づ唐軍進擊前に於ける遼東の兩派別勢力關係より見て行く必要がある。

三國史記に云ふ未降十一城は反唐派たる男建黨所屬のものである。各城の位置を逐一明かにすることは出來ないが、その中の新城州が今の撫順、遼東城州が遼陽、安市城が海城東南三邦里の英城子に當ることは已に定說となつてゐる所であり、北扶餘城が農安の地なることは本稿に究明した如くであるから、男建等抗唐派の勢力は扶餘城（農安）より新城（撫順）遼東城（遼陽）安市（英城子）の諸城を結ぶ一線、即ち國境一帶を確保して居たことが知られる。右四城以外の節・豊夫・祧・大豆山・屋・白石・多伐嶽等七城の位置は判らないが、四城の間に挾んで列擧してゐる點より推すに、やはり西方國境地帶に東北より西南に並列してゐたのであらう。即ち此等十一城は何れも嘗て高句麗が東北扶餘より西南海に至る千有餘里にわたつて築いた長城を外壁として此に沿う地帶に並列點在し、以て長城の一線を固める要塞群の役割をなして居たのであらう。

次に已降十一城の位置も亦此を知悉することは出來ないが、掠嵓城は蒼巖城で今の興京老城、木底城はその西方の木奇、南蘇城は撫順の東方七十支里の薩爾滸に比定せられ、國内州の輯安と共にその比定は確定的となつて居る。そして掠嵓（蒼巖）城より國内州の間に列せられて居る位置不明の藪口・甘勿主・葵田谷・心岳の四城は富爾江及び新開河の流域に存在してゐたものであらうと推測せられてゐる。最後の屑夫婁・朽岳・鑠木等三城は國内州附近に在つたのではないかとも想はれるが、明かでない。即ち十一州の中八州は服唐派の泉男生が據る國内州より南蘇城に至る古來の重要交通路上に沿在して居たのである。此の街道を南蘇城より更に西行すれば新城に着き、それより更に西行を續ければ遼河を渡つて唐領に入るを得た。然し新城は男建派に屬して居たのであるから、男生は新城を以て唐軍との聯絡を絶たれて居たわけである。

逃城七及び打得城三が何れも男建派に屬するものであつたことは云ふ迄もない。かく觀ずるに、覺書の三十二城中、男生に屬するもの十一城、男建に屬するもの二十一城となる。但し此の三十二城は鴨綠江以北の城を悉したものでは無く、差し當り唐軍の作戰上何らかの意味で問題となつたもののみを擧げたのであらうから、右の割合から直ちに兄弟の鴨綠江以北に於ける勢力の大小を測定することは出來ないが、然し抗唐派の男建等が斷然優勢で、服唐派の男生が著しく劣勢であつたこと丈は充分認められるであらう。後述する如く、愈々唐が遼河の線を破つて突入した時には男生派十一城の中、南蘇・木底・蒼巖等蘇子河流域の三城も已に男建派の手中に歸してゐた。益々男生派の非勢であつたことを知るに足らう。唐軍發遣當時の高句麗領遼東内に於ける派別勢力を以上の如く考察し、此に對して唐軍が如何なる策戰を採つたかを次に觀察する。

唐の高句麗討滅作戰は大觀して前後兩段に大別せられて居た樣である。前段の作戰は鴨綠江以北の戡定であり、後段の作戰は鴨綠江以南の進擊攻滅である。鴨綠江を以て兩段區別の境としたのは、先づ江北を平定して江南進擊の足場を固め、服唐派の男生一派を救出收容し、更に山東より出発せる海軍と聯絡し、かくて新陣容を整へた上で最後の猛攻に移らんとするに在つた樣である。三國史記に見える覺書きはその內容が悉く江北の城砦に關するもののみである點から推して明かな如く、此の前段作戰の參考として作られたものと解せられる。此の前段作戰に當つたのは李勣を總司令官とする遼西經由の陸軍主力部隊である。次に此の陸軍部隊の動きに就いて觀察する。

高句麗の西境一帶は北端より南端に亡る迄悉く反唐派の男建に屬する諸城で固められてゐたのであるから、前段作戰の主役部隊として遼西陸路より進擊した總司令官李勣以下の唐の主力軍團は境上の何れかに突破口を作らねばならなかつたわけである。かくて李勣が選んだ境上突破地點は新城であつた。新城を選んだ理由は、舊唐書卷一九九高麗傳に

（乾封）二年二月新唐書卷二二〇。高麗傳、作正月。勣度遼至新城。謂諸將曰。新城是高麗西境鎭城。最爲要害。若不先圖。餘城未易可下。遂引兵。於新城西南據山築柵。且攻且守。云云。

とある如く、此所を拔かずしては他城の攻略成らずと觀てとつたからであると云ふ。名將李勣の判斷であるから正にその通りであつたのであらうが、又服唐派たる國內城の男生と聯絡を取る上に重要であつたことも理由の一つであつたに違ひあるまい。それ丈に新城の要害は堅固であり、城兵も精强優勢で、攻略に長い日子を費さなければならなかつた。李勣が新城に對して半永久的な柵を築き、且つ攻め且つ守るの策をとつたのはそれが爲めである。又此の攻城戰は、それが最初の突破大作戰であつた爲め、陸路遼東に向つた唐の諸將は、總帥李勣以下、契苾何力・高侃・龐

同善・薛仁貴等何れも此に參加した。かくて唐軍の總兵力を集中して力攻すること約半歳、九月に至つて漸く此を陷れた。新城が陷ると此所に集つて居た諸將は夫々別個の作戰に從ふこととなつた。

先づ總司令官李勣の行動を見るに、已に池内先生の考證せられてゐる如く、遼東・安市等十六城を破つてゐる。蓋し新城以南の境上一帶に在る諸城、即ち反唐派に屬する諸城を攻畧したのであらう、そして彼は今の九連城に比定せられる大行城に出てゐる。從つて右の十六城は新城より南下して安市城方面に出で、更に東して大行城に至る間に在つた城で、何れも男建派に屬して居たのであらう。李勣が鴨綠江下流の大行城方面を目指して突進したのは、別に山東より差遣せられた水軍と聯絡し、總司令官として全軍の掌握を早急に成就し、以て後段作戰への移行を促進せんとするに在つたものと思はれる。

李勣の発進後も契苾何力や薛仁貴等の部將は大抵新城に殘留してゐた樣である。從つてその部兵を擁した新城の唐軍は尙頗る優勢であつた。此の殘留軍の司令官となつたのは、冊府元龜卷九八六外臣部・征討門に

乾封二年九月。李勣拔高麗之新城。遣副將契苾何力守之。

とある如く契苾何力であつた。又此の記事によつて彼が李勣の下に副總司令官をつとめて居たことも知られる。彼は高句麗に内訌が起り、男生の請附求援使が着唐した際、取敢ず赴援應接の爲めに差遣を命ぜられ、遼東道安撫大使の職を帶びて最先に出征した者である。やがて戰爭が擴大して更に李勣が總司令官として遣され、安撫大使の任を帶するに及び、彼の安撫大使は當然解任せられたことと思はれるが、それと共に副總司令官となつてゐたのであらう。要鎭新城を喪つた高句麗は當然の措置として此が奪還に力を入れ、新城の附近に大兵を集中した。唐軍の新城殘留部隊

が多かつたのは、かうした敵の逆襲に對しなければならなかつた爲めである。高句麗の逆襲に就いては新唐書卷一〇契苾何力傳に

上略。勣已拔新城。留何力守。時高麗兵十五萬屯遼水。引靺鞨衆數萬據南蘇城。何力奮擊破之。斬首萬級。

とあり、舊唐書卷一〇九同人傳にも

上略。高麗有衆十五萬。屯於遼水。又引靺鞨數萬據南蘇城。何力奮擊皆大破之。斬首萬餘級。

とあつて、李勣の發進後、新城の東方遠からぬ南蘇城に靺鞨兵數萬が據つて新城を脅かし、又高麗兵十五萬が遼水に屯して同じく新城に迫らんとして居たと云ふ。此等の兵が男建派の者であることは極めて明かである。而して遼水に屯した者を高麗兵と云ひ、南蘇城に據つた者を靺鞨兵と云つてゐるが、その實は何れも高句麗國軍構成の通則通り高句麗兵と靺鞨兵との合同軍であつたに相違ない。此を或は高麗兵と云ひ、或は靺鞨兵と云つてゐるのは、單なる行文の紋か、若しくは現地からの報告が一はその國籍に從つて高麗兵として通報せられ、一はその主力の實體に從つて靺鞨兵として通報せられた爲めかであらう。又十五萬と云ひ、數萬と云つてゐるのも、共に大軍であつたことを示す丈で、實數がかくも多かつたと見る必要はあるまい。

南蘇城は、已述の如く、新城攻擊前には服唐派の男生に屬してゐた。それが今や新城に脅威を與へる有力部隊の據城となつてゐるのは、男建派が此を奪取したことを示す。而して此所に據つたと云ふ有力な靺鞨兵はどこから發遣せられた者であるかを考へるに、それは恐らく渾發河流域の粟末靺鞨であつたのであらう。彼等が夙く南北朝時代より高句麗に臣屬してゐたことは本論に詳考した如くである。彼等は高句麗存亡の此の戰に驅り催され渾發河流域より渾

河の上源に出で、蘇子河の流域に入つて南蘇城を占據したのであらう。そして此の占據は男建派が男生と唐との聯絡を遮斷し、且つ新城内に籠る自派の兵を聲援しつゝ唐軍の東進を防がん爲めに、新城陷落以前に成就し、陷落以後その奪回への足場としたのであらう。

一方、遼水に屯したと云ふ軍に就いて考へるに、先づその屯駐地は遼水に沿う一要地であると共に新城に出る交通路上の要衝でもあつた筈であるから、恐らく今の鐵嶺附近であらう。此所からは會元堡を經て撫順、即ち新城に入る街道があり、新城は實に此の街道を扼する城塞であつたのである。かく考へると、此の軍の発進地は恐らく扶餘地方で、十五萬と號する大軍の主體も扶餘靺鞨であつたのであらう。即ち遼水に屯した高句麗軍と云ふのは、勿論、若干の高句麗兵を交へてゐたではあらうが、その實、殆んどすべて扶餘靺鞨であつたのである。同樣に、南蘇城に據つたと云ふ回跋靺鞨の中にも若干の高句麗兵が交つてゐたであらう。

以上の考察に據り、新城を喪つた高句麗は粟末靺鞨を動員して、南蘇城と鐵嶺地方とを双柄とする鋏狀攻擊に依り此を奪還せんとしてゐたことが明かとなつた。此に對する新城殘留部隊の策戰を見るに、先揭契苾何力傳には彼が此の兩面の軍を共に擊退したかの如く敍してゐる。然し彼一人が此の兩軍を共に擊破したとはどうしても受取り難い。二個の敵部隊は新城を挾んで反對の方面に遠く離れて駐據してゐた。此れ、彼れ一人が兩軍を共に破つたと考へ難い第一の理由である。又新城には龐同善・高侃・薛仁貴等の僚將が居た。彼等が契苾何力只一人を煩はして坐視してゐた筈はない。此れ第二の理由である。契苾何力が破つた敵は何れか一方で、他は僚將中の誰かが當つたと解す可きである。

醪つて先揭新舊兩唐書の契苾何力傳の續きを見ると、前者には

乘勝進。拔八城。引兵還。與勣會。

とあり、後者には

乘勝而進。凡拔七城。乃廻軍。會英國公李勣於鴨淥水。

とあつて、八城又は七城を拔いた後ち、先に大行城方面より鴨綠水に達してゐた李勣の軍に會したと云ふ。此の八城及び七城に就いては已に池內先生の適確な解說がある。即ち此の七城は先揭覺書の鴨淥水以北已降十一城中の南蘇を除く木底・蒼巖(掠嵒)・藪口・甘勿主・奏田谷・心岳・國內の諸城で、八城は此に南蘇を加へたものである。即ち此の解說に依り、契苾何力が擊破したのは南蘇城の敵であつたこと、彼は敵首萬餘級を斬り城を陷れて後ち、更に蘇子河に沿う街道の梗塞を啓開し、以て國內城に據る泉男生の軍に聯絡したことが知られるのである。

契苾何力は泉男生の求援の使が着唐した時、取敢ず赴援應接せしむ可く差遣せられた者で、そのことは資治通鑑卷二〇一唐紀・乾封元年の條に

男生走保別城(國內城)。使其子獻誠。詣闕求救。六月壬寅。以右驍衛大將軍契苾何力爲遼東道安撫大使。將兵救之。以獻誠爲右武衛將軍。使爲鄉導。

と明記せられてゐる。即ち彼は本國發進の際より國內城の男生救出の任を授けられてゐたのである。彼が南蘇の敵を擊ち破り、更に國內城への街道を啓開したのは、かうした彼の任務を達成せんが爲めであつたのである。尙彼が鴨綠水の李勣に會したのは男生救出の大任を果した彼として、更に鴨綠江以南の後段作戰に參加せんが爲めである。

さて李勣・契苾何力等がそれぞれ東進の急務を帶して居たとすれば、新城に殘つて此を守備す可き者は龐同善・高侃・薛仁貴等の諸將であつたこととなる。殊に薛仁貴は殿後軍の將であつたのであるから、最後迄新城に殘留して此が保衛に當る可き使命を有してゐたものと解せられる。先に契苾何力が新城殘留軍の將として留つたことを傳へた記事を紹介し、一應此を記事のままに受取つておいたが、實は彼も亦急ぎ東進す可き重大任務を唐帝より授けられて居たのであるから、その殘留は李勣の新城出發直後のことを云つたものでなければならぬ。而して彼が李勣と同時、若しくは先だつて新城を発進しなかつたのは、その進路を新城の隣東たる南蘇城に於いて高句麗軍に妨遏せられてゐた爲めであらう。かく彼は止むを得ずして暫時新城に留まつたが、然しそれは南蘇方面の敵情を偵知する迄のことであつて、やがて敵情が判明すると共に新城を出で南蘇城の攻陷に力を注いだのであらう。されば彼の新城殘留は短時日であつたと思はれるが、副總司令官として李勣に次ぐ地位を有して居た彼は、その殘留期間、當然在新城軍の總帥となつてゐた筈である。從つて李勣が新城を発進する際、契苾何力を殘留軍の總帥としたと云ふ先掲冊府元龜の記事は決して虛傳ではない。只それが止を得ず殘留した短時日の間の總帥であつたことを補足する必要があるだけである。契苾何力が発進した後ちの新城の總帥となつた者が誰であるかは判らないが、龐同善・高侃・薛仁貴等の諸將が殘留して城を守つて居たことは確證がある。

資治通鑑卷二〇一唐紀・乾封二年九月辛未の條に、新城を陷れた李勣が更に他に進擊したことを述べた後ち

龐同善・高侃尙在新城。泉男建遣兵襲其營。左武營將軍薛仁貴擊破之。

とあり、冊府元龜卷九八六外臣部征討門や舊唐書卷八三及び新唐書卷一一の各薛仁貴傳にも此に相當する記事があつて、新城

奪回に來襲した敵を龐・高・薛の三將が破つたと傳へてゐるが、此は新城守備の任を彼等三人が受持つて居たことを示す。尙傳に依れば此の來襲は夜襲であつたと云ふ。所で考へなければならぬのは、此の敵はどこから來襲した者であるかと云ふことである。それは必ず南蘇城に據つてゐた者か、又は遼水に屯して居た者か、その何れかでなければならぬ。而してその來襲を防いだ大將は龐・高・薛の三人であつたと云ひ、契苾何力の名がその中に見えないのは、此の敵が遼水に屯して居た兵であつたことを推知せしめる。若し南蘇城の敵兵ならば、契苾何力もその戰に參加し、寧ろ中心的役割を果して居た筈であるからである。契苾何力の參加した形迹が無いのは、彼が專ら南蘇城の敵に當つてゐたからに相違なく、敵の夜襲があつた時、彼は恐らく已に南蘇城に向けて出陣してゐたものと解せられる。或は思ふに、南蘇城に對する攻擊を牽制せんが爲めに遼水の敵の新城夜襲となつたのかも知れない。此の牽制の當否はしばらく疑問とするも、とにかく來襲の敵が遼水に屯して居た扶餘靺鞨であつたことは殆んど誤りないものと思はれる。その來襲は彼等の屯駐地と推定せられる鐵嶺方面より會元堡經由の街道を攻め上つたのであらう。かく考へると、上掲資治通鑑の記事の續きに

　侃進至金山。與高麗戰不利。高麗乘勝逐北。仁貴引兵橫擊大破之。斬首五萬餘級。

とある金山の方位、及び金山の戰の意義も自ら明かとなつて來る。

遼河に十五萬と號する高句麗の大軍が屯して新城を窺ひ、遂に夜襲さへ仕掛けて來たとすれば、此の屯駐軍を擊碎せざる限り新城の脅威は除かれなかつたわけで、新城守備の三將は當然此の擊破に乘出した筈である。金山の戰は必ず夜襲の敵を破つた新城の三將が勝に乘じてその北げゐを逐ひ、大追擊戰を演じたものでなければならぬ。遼河に屯

した敵は扶餘城を根據としたものである。されば夜襲に失敗し更に追擊せられた敵が敗走した方向は扶餘城方面を指して居たものと考へられる。即ち金山は新城を出て今の鐵嶺地方に至り、更にそれより扶餘城に至る途中に在る要害の山名と見る可きである。されば此の金山は元の遺將納哈出の根據地として明初の史上に名高い東遼河の上流の北岸懷德方面の金山に比定して大過無いであらう。今の長嶺街南方鄭家屯街道上に在る新安鎭の東方に在る金山堡は或は此の金山と關係のある名稱かも知れない、即ち此の邊りが金山の西端で、その東方に展がる山地が金山であつたのではないかとも想はれる。所で此の見解を主張するには、一見、甚だ都合の惡い有力な反證的記事が存してゐる。それは上揭資治通鑑の記事に續いて

拔南蘇・木底・蒼巖三城。與泉男生軍合。

とある一句である。此の句を先揭の上文に續けて讀めば、金山の戰に大勝を博した高侃・薛仁貴等は勢に乘じて南蘇・木底・蒼巖の三城を拔き、更に進んで泉男生の軍に合した（即ち國內城と聯絡をつけた）こととなる。若し金山を以て本稿の主張する如く東遼河方面の山に比定すれば、それは蘇子河流域の南蘇等三城とは遠く懸け離れた地となり、實際の操兵技術より見て、金山の勝利に乘じ直ちに南蘇等の三城を衝くと云ふ關係は全く成立し得なくなる。又兩地は唐軍の作戰基地となつた新城を中に挾んでその西北と東南との反對側に位置し、從つて唐が此の兩地を同一部隊の作戰圈內に抱括せしめたと考へることも穩當でなくなつて來る。寧ろ新城より別個の二部隊を出し、兩作戰區域に分けて此を分擔せしめたと見るのが戰略的に妥當である。かく金山を東遼河方面に比定する時、金山の戰に續く次の戰鬪記事との間に大きな矛盾を生ずるのであつて、此のことは金山に對する本稿の比定に誤りがあるのではないか

との疑を抱かせる。そこで此の矛盾を解決する必要が生じて來るのであるが、その最も手取り早い安易な方法としては、先の比定を棄て、新に金山を南蘇城の近く新城寄りの地に比定し直すと云ふ案が考へられる。然しかかる考へは絶對に容されないと云ふ事情が存してゐるのである。

南蘇・木底・蒼巖の三城は新城より蘇子河の流域に沿つて高句麗の國内城に至る街道上の要塞である。此を攻陷して東進す可き部隊は國内城の泉男生を救援する任務を負ふた者でなければならぬ。而して此の大任を唐帝より授けられて居たのは契苾何力の部隊である。事實、彼が右の三城を含む八城を經略して國内城の泉男生に聯絡し、その大任を果したことは已述の如くである。契苾何力が已に經略した諸城を薛仁貴が再び經略する必要は無かつた筈である。のみならず、金山に戰つた薛仁貴は殿後軍の將で、その主任務は新城を確保し、此所より奥深く進擊して行つた唐の諸軍の後方聯絡を安全にするに在つた。さうした任務を有つ彼が、上掲資治通鑑の文に云ふが如く、南蘇等三城を攻陷し更に遠く國内城に向つて進出する筈はない。殊に扶餘方面の靺鞨の脅威が除かれざる以前に新城を放任してかかる行動に出ることは絶對に許されなかつた筈である。單に筈と云ふだけで無く、論より證據、實際に南蘇等の諸城を經略して國内城と聯絡を通じたのは、初めからその任務を帶してゐた契苾何力であること、已述の如くである。かく薛仁貴等の南蘇城及びそれ以東方面への進擊に可能性が無く寧ろその活動方向は扶餘靺鞨の脅威除去に在つたと推考せられる以上、金山を以て東遼河方面ならんとする說を棄て、此を南蘇城方面に求め直す必要はなくなる。金山在北說より生ずる矛盾は他の面から解決す可きであらう。筆者は此の矛盾を以て筆者の位置比定の誤より生ずるものではなく、史料としての上掲記事自体の錯誤に由るものと思考する。

さて、唐の本土より陸路を進んだ李勣統帥の唐軍が新城に集中して此を攻陷した後ちは、數手に分れて作戰を開始した結果、その作戰地域は廣大となり、然も戰鬪は各地に行はれることとなつた。されば唐朝に集中する戰況報告は新城陷落後頓に頻繁錯綜を加へた筈である。然しそれ等の報告は史官の手によつて到着の都度記錄せられたであらうし、又その際にはそれがどの戰線で、何時、誰の部隊の擧げた戰果であるかと云ふことも明確に知られてゐたであらう。所が飾文には力を入れるが敍述の內容表現には大雜把な傾向をもつ支那の文筆家が錯綜する各地の戰況を逐次記錄した結果は、此を閱讀する後人をしてその戰果と、戰果を擧げた武將や部隊、場所、時等との關係に就いて錯誤を抱かしめるが如き記述を殘したのではないかと想はれる。契苾何力等が擧げた筈の南蘇等諸城の攻略戰果が薛仁貴等の戰果なるかの如くに傳へられてゐるのも、或はかうした事情に由つて生じた錯誤ではあるまいか。かく考へて此の戰役に關する諸記事を見直すに、確かにそれと認められるものが一二ならず見出される。その一例を此所に問題となつてゐる契苾何力に就いて示しておく。

舊唐書卷一〇九契苾何力傳に

乾封元年。又爲遼東道行軍大總管兼安撫大使。高麗有衆十五萬屯於遼水。又引靺鞨數萬據南蘇城。何力奪擊皆破之。斬首萬餘級。乘勝而進。凡拔七城。乃廻軍。

とあり、新唐書卷一〇同人傳にも同樣の記事があること、先に引用して說明しておいた如くである。所で彼が南蘇城を破り、更に七城を從へて國內城への聯絡を啓いたことは紛れない事實であるが、遼水の敵を破つたのは、上述の如く薛仁貴等新城留守の三將である。從つて傳に遼水・南蘇の敵を共に彼が擊破したと云ふのは誤りで、遼水の戰果は薛

仁貴等の武功が誤つて彼に移されて居るのである。然し誤つて契苾何力の功とせられてゐる右の遼水の敵擊破は、新城の夜襲戰と金山の戰との間に更に一合戰あつたことを敎へてゐる。即ち新城の留將達は遼水、即ち鐵嶺附近と推定せられる地に屯駐せる敵が送つた夜襲部隊を擊退し、此に乘じて更に本隊をも擊破し、その北げるを逐うて北進し、再び金山に戰つて此を大敗せしめたことが明かにせられるのである。然しそれはともかくとして、薛仁貴等の武功が契苾何力に移されてゐたとすれば、逆に南蘇方面に於ける契苾何力の武功が薛仁貴に移されたと云ふ同じ誤りは充分考へられるであらう。かく考へれば金山の比定に對する本稿の見解は此を棄て去る必要はなく、然もその矛盾も亦自ら解決せられる。尙此の薛仁貴の武功なるが如く誤り傳へられた契苾何力の武功は、男建が男生から奪つてゐた城が南蘇一城だけではなく、その東方の木底・蒼巖二城にも及んでゐたことを明かにし、契苾何力傳の不備を補つてゐる。

金山の戰に於ける薛仁貴の戰果は斬首五萬餘級に及んだと云ふ。果して此れ丈の實數を算したか否か疑ひ無きを得ないが、餘程の大成功であつたと見え、冊府元龜（卷九八六）外臣部・征討門及び舊唐書の薛仁貴傳には金山の戰勝に對し高宗より特に嘉賞の勅語を賜はつたことを記してゐる。所が此の勅語の中には南蘇以下三城の攻陷に觸れた語は全くない。此れ亦此の三城攻陷が彼の武功と關係のなかつたことを察知する一の參考とならう。尙契苾何力と薛仁貴との武功の相互移入の誤りは、資治通鑑のみでなく、冊府元龜、新舊唐書等の主要文獻が悉く陷つてゐる所であるから、資治通鑑の著者が犯した責ではなく、已に早くより此の誤りを傳へた著名史書が存してゐたのであらう。

さて三國史記（卷三七）地理志に揭げられた鴨淥水以北未降十一城が北は北扶餘城州より南は安市城に至る高句麗西境地

帶上の要城であつたことは先に述べた如くである。所でその排列を見るに、筆頭に北扶餘城州を擧げ、次に節城（蕪子忽）豐夫城（肖巴忽）の二城を列べ、續いて新城州（仇次忽）を記してゐる。從つて節城・豐夫城の二城は前者を北とし、後者を南として農安と撫順との間に介在して居た要城と見なければならぬ。然し兩城ともに今尙その位置不明とせられてゐる。所で今の開原の東方に高句麗城の遺趾が現存してゐると云ひ、又後年の歷史に徵して知られる開原地方の重要性に鑑み、高句麗が此所に一要城を置いてゐたことは疑ひ無く、それは上述二要城の中、何れか一方に當るものであらう。又今の鐵嶺の地は農安・長春方面より開原を經て奉天・遼陽方面に至る南北滿聯絡の大街道と撫順より會元堡を經て此の街道に會通する要衝上に在り、又唐が高句麗を滅して安東都護府を設けた時延津州を置き、契丹が此の地方を經略した時も銀州（延津縣）を置いた所である。かかる要地に對しては高句麗も必ずや一要城を設置したであらう。かく考へると、節城は開原附近に、豐夫城は鐵嶺附近に比定す可きであらう。かかる比定の上に立つて新城奪還に出動した扶餘靺鞨軍と唐將薛仁貴との交戰を再考するに、その經過が一層詳しく、且つ合理的に理解せられる。卽ち十五萬と號する扶餘靺鞨軍が屯駐したと云ふ遼河邊の地が鐵嶺附近と推考せられることは先に述べたが、その屯駐軍の據城となつたのは豐夫城であらう。十五萬と號する大軍は、文字通り十五萬ではなかつたにしても、豐富城のみでは收容し難かつたとも考へられるから、後方の節城も併せ利用せられてゐたのではないかと想はれる。新城に送つた夜襲隊は恐らく豐夫城から繰出したのであらう。夜襲隊を却けた薛仁貴等の軍が更に遼水の本隊を破つた戰と云ふのは、此の豐夫城を中心とする攻防戰であつたのであらう。敗退した扶餘靺鞨軍は當然此の城を喪つたわけである。恐らく節城も守れなくなり、殆んど時を同じうして陷つたであらう。かくて鐵嶺・開原一帶の地を逐

はれた扶餘靺鞨軍が追躡し來る唐軍と戰つたのが金山の戰であつたと解せられる。

薛仁貴等の殿後軍が果さなければならなかつた最大の使命は、反唐側の男建等に附して遼陽・新城方面を脅かしつつあつた扶餘靺鞨の根據を衝いて此れを擊碎するに在つた。薛仁貴等が遼水の勝利に滿足して新城に引あげることをせず、劣勢の軍兵を提げて敢て追擊作戰に出たのは、扶餘城の攻陷を絶對の使命として居たからである。

遼史卷三八地理志・東京道の項の府州配置の狀態その他より推すに、契丹時代以前の開原・扶餘（農安）を結ぶ街道は開原より昌圖・八面城を經過して居り、今の街道よりも西方の平坦地を迂廻してゐた。敗退した扶餘靺鞨軍も、此れを追躡した唐軍も共に此の西方迂廻の當時の街道に沿つてゐたものと推測せられる。所で此の方面は一帶の平原で、勝に乘じて北進する唐軍を防遏邀擊す可き天險はない。彼等の本據たる農安地方を衛る可き天險は東遼河の北方懷德西方に展開する山地、即ち金山のみである。扶餘靺鞨としては當然此れを死守しなければならぬ、唐側の誇張宣傳ではあるが、とにかく五萬と云はれる損害を出す程の大激戰を交へたのは、金山が扶餘城を守る最後の前衛地であつた爲めである。尙李勣の作戰覺書きに唐軍の攻略目標として扶餘城に並べて節・豐夫の二城を擧げてあるのは、扶餘城攻略の目的を達成する爲めには此の二城の攻陷が必要であつたことを示すものと解す可きで、此の點からも此の二城の位置を新城より扶餘城に向ふ街道上の要衝で然も新城に近く新城の脅威となる可き鐵嶺・開原方面に比定するのが適當と思はれる。鐵嶺・開原地方は安東都護府→小高句麗・渤海時代を經て遼代に至る迄引續いて要會の地をなしてゐた。但し此のことに就いては別に「小高句麗國の研究」と題して詳述する。

さて金山が懷德地方より西方に展開する山地を指し、且つそれが扶餘の南面を防衛する最大にして最後の天險であ

つたことと、此の防衛に於ける扶餘靺鞨軍の大敗とを併せ考へれば、此れに次ぐ戰が彼等の根據たる扶餘城の大攻防戰であつたことは自ら明かであらう。

此の攻防戰を記した記事は本附說の冒頭に揭げた資治通鑑卷二〇一唐紀・總章元年二月壬午の條の左の一節である。

李勣等拔高麗扶餘城。（先是）薛仁貴旣破高麗於金山。乘勝將兵三千一作二千人。將攻扶餘城。諸將以其兵少止之。仁貴曰。兵不在多。顧用之何如耳。遂爲前鋒以進。與高麗戰大破之。殺獲萬餘人。遂破扶餘城。扶餘川州之誤歟中四十餘城。皆望風請降。

かくて伊通河邊の扶餘城は遂に唐軍の手に落ち扶餘靺鞨の四十餘城も亦風を望んで請降したのである。尙此の戰に於いて扶餘城・扶餘靺鞨兵をすべて高句麗の城、高句麗兵と記してゐるのは、それが高句麗に臣屬してゐたからである。又李勣が此の戰に與つてゐたとあるが、此は正しくない。彼は新城攻陷後早くも鴨綠江流域に進擊して後段作戰に邁進しつつあつたのであるから、遼北の扶餘城攻略戰に參加してゐた筈はないのである。彼が此の戰に與つてゐた如く記されてゐるのは、或は彼が總司令官として此の戰の殊勳者薛仁貴をもその節度下においてゐた爲めに因るのかも知れないが、それにしても此れ亦先述の武功誤移の一例と云ふ可きであらう。風を望んで來降したと云ふ扶餘州四十餘城に就いても一考の必要がある。

伊通河流域の住民は靺鞨人である。その外に此の地方制壓の爲めに差遣せられた若干の高句麗人官吏や軍人、或は被俘投入の遊牧民族や漢人等も居たかも知れないが、それにしてもその數は僅少で、主住民は此の地土着の扶餘靺鞨であつたと見て誤りない。此の扶餘靺鞨は夥しく多數の小部に分れて住み、此の小部が幾つか集つて大部を成し、各

小部には部長が居り、部長中の有力者が大部長に推され、以て一個の集團勢力をなしてゐた。そしてかうした集團が多數並立してゐた。此のことに就いては「靺鞨七部の內部構成」と題して後章に詳考する豫定であるが、それを俟つ迄もなく、本論第三節第二項に論述した扶餘靺鞨突地稽が厥稽部と呼ばれる小部の酋長たると同時に此と等格の他の七部を併せた都合八部の大部長であり、隋に來歸した時率ゐてゐた部民千餘戶を數へたと云ふ一例によつても、右に述べた所は略々認められる。四十餘城と云ふのはかかる大部的集團の據城であらう。或は後世女眞の和屯に當るものではないかとも想はれる。かく見れば、此の廣濶な大沃野に四十餘城が點在して居たのは相應しい事象として受取ることが出來る。さうして此等四十餘城は扶餘城の統轄に屬し、高句麗の扶餘靺鞨統轄の中心も此所におかれてゐたのであらう。即ち扶餘城を治所とし、四十餘城の扶餘靺鞨を管轄してゐたのが高句麗の北扶餘城州であつたのであらう。

扶餘城を喪つた高句麗は大兵を送つて此を奪回せんとしたが、此れ亦薛仁貴の大破する所となつた。資治通鑑に續いて

泉男建復遣兵五萬人。救扶餘城。與李勣於遇薛（新唐書卷二二高麗傳作薩）賀水。合戰大破之。斬獲三萬餘人。進攻大行城拔之。

とある薛（薩）賀水の戰が此れで、舊唐書卷五高宗本紀・新唐書卷二〇高麗傳等には右の戰果を更に詳しく斬首五千餘級獲生口三萬餘級、器械牛馬勝げて計ふ可からずと傳へてゐる。敵勢五萬餘、斬獲三萬餘も共に多少の誇張があらうが、とにかく殲滅的大打擊を與へたこと丈は確かである。因みに此の戰の唐側武將を李勣としてゐるのは、扶餘城攻陷戰の場合と同樣の誤りで、更に薛賀水の戰に續けて今の九連城に比定せられる大行城の攻拔を記してゐるのは、此

の誤りに由つて生じた行文の綴合はせである。從つて大行城を陷れたのは紛れなく李勣であるが、此の攻陷を薛賀水の戰と聯絡あるが如く結びつけてゐるのは正しくない。兩交戰は遠隔の地に於いて別々の部隊に依つて行はれたものである。薛賀水の勝利が薛仁貴の武功であつたことは云ふ迄もない。

さて右記事に依れば男建が五萬と號する大軍を送つたのは扶餘城救援の爲めであつたと云ふから、その発遣は陷落以前であつたことが知られる。所が救援は間に合はず、よつて救援軍はそのまま奪回戰を演じ、却つて敗れたのであらう。此の救援軍も靺鞨兵を主力とせるものであつたことは容易に推察せられるが、それが何處の住民であつたかは全く傳へられてゐない。然し吉林・烏拉地方は扶餘城に近く、且つそこには有力な粟末靺鞨の集團が居り早く北朝時代から高句麗に臣服協力してゐた事實を考へるに、扶餘城救援の五萬の軍の主力も此の地方の者、即ち本稿が假に浦水靺鞨と名けた所のものであらう。して見れば、薛(薩)賀水は扶餘城東方の河水でなければならなくなる。薛(薩)賀の音は松花・宋瓦里等の音に近く聞えるが、さりとて此を松花江に比定せんにはその扶餘城よりの位置が遠きに失する感がないでも無い。扶餘城との關係のみより見れば寧ろ伊通河に比定するのが穩當らしくもあるが、さりとてかく斷ずるに足る依據もない。又契丹時代に黃龍府(渤海の扶餘府の更名)の渤海人燕頗の叛に關して史に現れる冶河と關係する河ではないかとの推想も起るが、此を推想以上に確める手掛りはない。要するに薛賀水は扶餘城方面に近い河水であることは紛れないが、今のどの河名に當つ可きかは筆者の現在推斷し得ざる所で、切に後考の補正を俟つ外ない。

新唐書の薛仁貴傳に依れば、扶餘城を取り州內四十餘城を降した結果、「威震遼海」ふたと云ふ。遼海とは東蒙古

の東邊、即ち伊通・東遼河兩流域に接する遼河以北の廣濶な地域を指す地方名で、海洋ではない。北史卷九突厥傳、木杆可汗の條にその勢力を述べて

其地。東自遼海以西至西海萬里。南自沙漠以北至北海五六千里。皆屬焉。

とあり、遡つて魏書卷一〇〇庫莫奚傳に後魏の太祖が和龍（朝陽）北方の庫莫奚を親征して此を服屬せしめたことを述べ

上略。十數年間。諸種與庫莫奚亦皆滋盛。乃聞遼海置戍和龍。諸夷震懼各獻方物。

とあるに依つて知られる如く、遼河北方の平濶地を遼海と呼ぶは夙く後魏時代に始つてゐるのである。從つて「威震遼海」とは扶餘城攻陷の大戰果によつてその勢威が遠く扶餘以西の遊牧民族間に迄鳴り響いたとの意味である。所が舊唐書の薛仁貴傳には扶餘方面を平定した後ちの彼の行動を敍して

仁貴便並海略地。與李勣大軍會于平壤城。

とある。そこで此の「並海略地」は遼海より案出せられた後世史家の机上文句に非るかとの疑念が一應起つて來るが、然しさればとてかく斷定することも出來ない。

新城を突破口としてそれより東進した唐の諸部隊にとつてはその敵地に於ける孤立化より免れると云ふ意味で新城の確保が絶對に必要であつた。所で此の新城を脅かしてゐたのは扶餘靺鞨であつた。安市方面の反唐諸城は李勣が東進の途次に擊破し、又回跋靺鞨は契苾何力が東進の際に南蘇・木底・蒼巖の諸城に破碎し、結局最後迄新城に敵したのは扶餘靺鞨のみであつた。殿後軍として新城に殘つた薛仁貴等の任務が主として此の扶餘擊碎に在つたことは極めて明かである。かくて薛仁貴は金山を越えて扶餘城を陷れ、その救援軍をも破つて完全に敵の戰力を碎滅した。今や

新城を脅かす敵はどこにも居ななくなつたのである。一方鴨綠江以南に於ける後段作戰は激烈に展開せられてゐた。されば彼も亦荏苒新城に逗留す可きで無く、直ちに後段作戰に馳せ參じて力を添へなければならなかつた。さればこそ彼も亦扶餘作戰が終るや直ちに兵を率ゐ李勣を追うて敵都平壤の攻略戰に會したのである。所が此の東進路が全く不明で、或は「並海略地」して平壤に着いたのかも知れないのである。尙此の句に就いては、以上二案の中、何れが正しいか、今後の補考に俟たねばならぬ。

以上、本稿は薛仁貴が總章元年に攻陷せる扶餘城を以て今の農安附近に在つた靺鞨族の一根據と斷定し、從つて此と聯關する金山を以て東遼河北方の山地とした。所で異說の多い此の扶餘城の位置をかく推斷するには、それ等異說の誤れる所以を一應分析批判する必要がある。然し他人の努力、殊に恩師や大先輩の苦心に對しアラ探し的に陷ることは筆者の好まぬ所であるから、只卑見の强化に必要な要點を簡單に述べる程度に止める。

最初に扶餘城及び金山の問題を扱はれた松井學士の比定は筆者の見解と同樣で當を得たものであり、慧眼畏服の至りであるが、此の前後に起つた南蘇等三城攻陷の役が誤つて薛仁貴の功に附會せられてゐることに對して全く批判說明を試みなかつたのは手拔かりである。此がそもそも異說を生み、折角正解を得ながら殆んど失考と定說づけられる迄に至る禍因となつたのである。

薛仁貴の扶餘城攻陷戰を南蘇等三城攻陷戰に結び付けて傳へてゐるのは、資治通鑑のみでなく、冊府元龜・新唐書・舊唐書等唐代の主要文獻悉く同樣である。それが爲め、事實は全く異つた二地方に於いて別個の二部隊によつて戰はれた戰を同一部隊の戰に歸せしめ、從つて懸隔した二戰場を同一方面に解せしめる因を作つた。かくて扶餘城を

南蘇城以遠に擬する見解を生み、或は津田博士の佟佳江下流域説、池内先生の咸興説を生むこととなつたのである。此の兩説は共に扶餘城と南蘇城との戰が連書せられてゐることから直ちにそれが同一方面の地ならんと速断し、根本史料に誤傳のなきかを省察しなかつた所に失考の因を有してゐるのである。兩戰役の連書が誤傳であることを明瞭にし得る以上、此の兩説が共に立説の根據を喪ふことは云ふ迄もあるまい。尙細かく此の兩説の反證を拾へば色々あるが略す。

さて薛仁貴の攻略した扶餘城を以て今の農安附近なりとすれば、隋唐時代の文獻に見える扶餘なる名稱は悉く農安附近の一地に當ることとなる。此を表示すれば次の如くである。

隋唐時代「扶餘」名稱表

名稱	年代	西暦	出典
扶餘城	開皇五年頃	五八五頃	北蕃風俗記（寰宇記所引）
扶餘城	貞觀五年頃	六三一頃	新舊唐書高句麗傳
北扶餘城州	乾封二年以前	六六七以前	三國史記三七卷・地理志
扶餘州	總章元年	六六八	資治通鑑卷二〇一、その他
扶餘城	載初二年	六九〇	舊唐書卷三九・地理志
浮渝靺鞨府	推定元寶末頃以後	七五〇頃以後	新唐書渤海傳

そして此のことから導き得る歸結は、隋唐時代に扶餘と呼ばれた城名地名は只一箇所であつたと云ふこととなる。

而して隋唐時代、伊通河流域の地が扶餘の名を專有して居たことは、此の地方が嘗ての盛國夫餘國と最も密接な關係をもつてゐたことを窺知せしむるに足る。さうしてそれは更に關係史料の極めて乏しい夫餘國史の研究に重要な參考資料を供することともなる。然しかうした隋唐時代の事實を利用する夫餘國の研究は先に筆者が「夫餘國考」と題して試みてゐるので此所にはその資料的價値の說明は畧す。更に此の隋唐時代の事實は、夫餘國の領內より興つて夫餘國を亡し、强大な勢力に発展し乍ら、その關係史料の一層缺乏せる勿吉の研究にも一の重要參考材料となる。然し此れ亦「勿吉考」と題して先に利用してゐるので此所には一切の說明を避ける。最後に一言注意しておきたいのは、此

粟末靺鞨出兵數表

內別	出兵地	出兵數	合戰地	同上損害
扶餘靺鞨	遼水（鐵嶺）	一五萬	金山	五萬餘
	扶餘城	—	扶餘城	俘斬一萬餘
回跋靺鞨	南蘇域	數萬	南蘇城	俘斬不明一萬餘級
涑水靺鞨	薛賀水	五萬	薛賀水	俘斬三五千餘級
合計	—	二〇數萬	—	俘斬一〇萬五千以上

の扶餘城攻陷戰に聯關して粟末靺鞨内の扶餘・涑水・回跋三集團の勢力が或る程度窺はれ、從つて粟末靺鞨の總兵力も或程度迄髣髴せしめ得ると云ふことである。上來論述した中よりその兵力量に關する數字を拾つて表示すれば右の如くである。即ち出兵數は史に傳へられる者二十數萬、損害は同じく史に記されるもののみで少くとも十萬五千以上に達したこととなる。勿論、此には支那文獻の通性及び戰果報告の通性から來た大きな誇張があつたと見なければならぬが、それにしても内別三地方の兵力に就いて見るも、將又その集計たる全粟末靺鞨の總兵力に就いて云ふも、決して弱小なものでなかつたこと丈は看取することが出來よう。かうした兵數は彼等が團結した時に大きく物を云ふ。當時の靺鞨は未だ大同團結をなして居なかつたので、かうした多數の兵を現實に威力あらしめることは出來なかつたが、然し現實はどうであつたにせよ、此れが潛在勢力として彼等靺鞨の一つの强味であつたことは否定出來ない。從つて右の兵力量は、たとへそれが文字通り信じ難いものであるにせよ、粟末靺鞨の活躍の歴史を理解して行く上に大きな參考となること疑ひ無く、殊に後年此の粟末靺鞨と白山靺鞨及び高句麗の遺民との合同協力に成つた渤海國の發展を考へる上に是非とも參考しなければならぬ重要資料と云ひ得るのである。但しさうした方面への右兵力資料の利用は別に更めて試みることとして此所には一切略す。

註

1　滿鮮地理歴史研究報告第十六册所收の論文。

2　史學雜誌二一篇二號「渤海の扶餘府並に遼の黄龍府に就きての考」

3　滿鮮地理歴史研究報告所載「勿吉考」の附説「扶餘城に就いて」

4　註1の論文中の説。

5　史淵三十四輯所載、拙稿「夫餘國考」

6　以上公孫氏と魏・吳との關係に就いては「後漢末三國時代に於ける東支那海上史の研究」と題して別に詳考する豫定であるが、その一部に關しては已に重松教授が九州帝大文學部十周年紀念「哲學史學文學論文集」中に「孫吳の海上發展と遼東との關係」と題する論文中に究明せられてゐるので參照を乞ふ。

7　此れ亦「海上史の研究」に於いて詳考する豫定であろが、一部は前出「扶餘國考」に言及してゐるので參照を乞ふ。

8　南蘇城等の比定は建國大學院各班研究報告書第十一號所載、高橋匡四郎學士「蘇子河流域に於ける高句麗と後女眞との遺蹟」に依る。

9　此のことは筆者が昭和十九年三月滿洲に赴いた時、撫順圖書館長渡邊三三氏より承はつた所である。

附　記

扶餘城の位置に就いては先に金毓黻氏が服部博士古稀紀念論集に「渤海扶餘府考」と題する論文を寄せて今の八面城の南の四面城に當ると主張せられてゐたが、最近恩師和田博士は東洋學報三二卷三號に於いて「魏の東方經略と扶餘城の問題」と題する論文を掲げ右の説を支持敷衍せられた。筆者は迂闊で金氏の右論説を知らずして本稿を組み、今更寡聞を恥ぢてゐる次第であるが、とにかく和田博士の近著によつて此の説あるを知り、一應此れを參考にしつゝ筆者の説を再顧して見た。何分史料の乏しい研究對象であり、そこに色々の説明が生れる所以があるわけで、それ丈に亦他の説に對し虛心に耳を傾ける必要が大きく感ぜられる。確に四面城説に依れば當時の狀勢を説明するのに都合のよい場合がある。然し又反對の場合もある。殊に高句麗滅亡以後の滿洲の狀勢、即ち在滿安東都護府の活動、小高句麗國の興亡、渤海の建國とその北進、純通古斯系靺鞨の動向、契丹の勃興等の大問題を研究して行く上に、四面城説は都合のよい場合がある樣であるが、反對にむしろ此れを許さない場合が多い樣である。少くとも筆者にはさう思へるので直ちに農安附近説を撤回する氣持ちには未だなれない。四面城説に就いては今後共絶えず心に檢討し續けるつ

もりではあるが、右樣の次第で敢て舊稿のまゝ發表した。四面城說を無視してゐるわけではないが、同時に又此の說によつて自說が論據を裏つたとも思つてゐない次第である。四面城說を遼代の通州からそれ以前の扶餘城にあてはめるには、倘都護府時代・小高句麗・渤海時代の情勢檢討が必要であらう。たとへ四面城說に落着くとしても此の考證過程を經なければ確實な論據に支へられた說とは云へないと思ふ。